



香港では小さいサツマイモの人気が高まっている
(注)一般的な国内向けのサイズ

グループ会社で青果物栽培を展開する建築資材卸の石田コーポレーション(鳥取県米子市)は、サツマイモ「紅はるか」の香港への本格的な輸出に乗り出す。今春から香港で人気が高い小ぶりなサイズのイモの栽培を始め、5年程度をメドに年間150トン規模への輸出拡大を目指す。サツマイモの国内需要は減少傾向で、国外の販路開拓で事業拡大を図る。

石田コーポレーションによると、日本で焼き芋に適したサイズは200g前後だが、香港では100g程度の小ぶりなサツマイモを炊飯器で蒸す

石田コーポレーション(注)財務省貿易統計によると、日本で焼き芋に適したサイズは200g前後だが、香港では100g程度の小ぶりなサツマイモを炊飯器で蒸す

グループ会社で青果物栽培を展開する建築資材卸の石田コーポレーション(鳥取県米子市)は、サツマイモ「紅はるか」の香港への本格的な輸出に乗り出す。今春から香港で人気が高い小ぶりなサイズのイモの栽培を始め、5年程度をメドに年間150トン規模への輸出拡大を目指す。サツマイモの国内需要は減少傾向で、国外の販路開拓で事業拡大を図る。

鳥取産PR 海外に活路

食べ方が定着しているといふ。同社はグループ会社の富ますシルクファーム(同市)で2014年から地域の耕作放棄地を活用してサツマイモの栽培を展開。18年3月期には6tで約2000tを収穫している。

日本食材を扱う香港は商社の味珍味と18年11月に輸出に関する契約を結び、試験輸出を始めた。19年3月までに、収穫したイモから小さいサイズ

サツマイモの輸出手先として香港は有力な市場だ。財務省の貿易統計によると、サツマイモの輸出量は13年の1029tから18年には3519tに増加。18年の輸出先で最多だった香港が半数超の1921tを占めた。

一方、国内のサツマイモの消費は長期に渡って低落傾向を続ける。農林水産省のまとめによると、全国の生食用サツマイモの消費量は1990年の約62万tから2016年には約41万tまで減った。

輸出のコストを考慮すると、石田コーポレーションの利益は国内と国外で比べると同程度になるという。石田康雄社長は「少子高齢化で消費が減っていくことを見据え、国外の販路開拓で事業の規模を拡大させたい」と話す。(山本公啓)

石田コーポ、年150トンめざす ミニサツマイモ香港へ

を選んで合計10tを輸出する。既に香港のイオンで販売しており、味珍味の代理人は「購入客から

イモが甘いと好評。味珍味は石田コーポレーションから輸入量を増やす計画だ」と話す。富ますシルクファームは19年春から、100g程度の香港向け紅はるかの栽培を始める。苗を植

工夫も加える。製品パッケージに同社のホームページにつながるQRコードを付け、自然豊かな鳥取で栽培されたことを中国語と英語で紹介する。同社は、収穫時にできたサツマイモの傷を治す

同社グループは観光名所の水木しげるロード(鳥取県境港市)にサツマイモのスイーツ店2店を開拓を見据え、18年10月にキユアリング後のイモを貯蔵する施設も新設

し、従来の倍となる200tまで貯蔵可能となつた。同社グループは観光名所の水木しげるロード(鳥取県境港市)にサツマイモのスイーツ店2店を開拓。主に訪日外国人にチヂやサツマイモの収穫体験を楽しんでもらう観光農園(米子市)を3月にも開業する予定で、独自の6次産業化を進めている。